『曾我物語』における源頼朝について
――真名本と仮名本の相違・その主題――

小井土　守敏

はじめに

『曾我物語』は、曾我兄弟の仇討ちを描くにあたり、その端を菊美入道寂心の所領相続の問題から語り起こしている。以来、建久四年五月二十八日、曾我兄弟が仇討ちを遂げるまでには、平治の乱、源頼朝の伊豆配流、挙兵、そして全国平定という歴史事実がある。兄弟の仇討ちを題材とするこの物語にあっては、頼朝の存在は不可欠であり、真名本[1]については、全十巻の内、巻二の中盤から巻四の冒頭まで、仮名本については、全十二巻の内、巻二を中心として、頼朝に関する記事が収められている。記事の内容・量の差こそあれ、真名本・仮名本双方に頼朝に関する記事が載る。

真名本『曾我物語』は、仇討ちの端を以下のように語り始めている。

然ニ自二近來一平氏永ク退散シテ源氏獨リ自レ誇リシ二朝恩ニ以ノ來、緑林枝枯テ吹ク風音秘ソカナリ、而ハ背ク叡慮ヲ青葉ハ被レ犯二雄劔ノ秋ノ霜ニ、亂ル朝章ヲ白浪ハ聲ヲ澄ス上絃ノ夜ノ月ニ、是ハ偏ニ羽林ノ意符（歟）超テ前代ニモ重キカ故ナリ、依レ之ニ青侍ハ秘メテ意ヲ有リ二土外ノ亂一、公私留メテ諍ヲ一人トシテ莫レ不ニコト歸伏セ一、而ハ世納リ、萬人誇レリ恩光ニ、然ハヲ何ソ、伊豆ノ國ノ住人伊藤ノ次郎助親カ孫子、曾我ノ十郎助成、同五郎時宗兄弟二人計コソ、不レ憚ニ將軍家ノ陣内ヲ、討テ二親ノ敵ヲ一藝ヲ

施シ當庭ハニ、名ヲ留ケレ後代ニ、　〔巻一（傍線は稿者による。以下同じ）〕

頼朝の全国平定によって平穏な世の中が訪れたその中で、頼朝の側近工藤祐経が討たれるという事件が、「然るを何ぞ」と、人々の耳目を驚かす。そして、その驚きとともに、兄弟の物語は語り始められるのである。頼朝が混乱の中から構築した体制を、部分的にであっても震撼させたという点で、兄弟が起こした事件の意味は大きい。

本稿は、真名本・仮名本『曾我物語』における頼朝――体制を構築した人物――に関する記事の相違を整理・検討し、頼朝の人物造型を明らかにした上で、それぞれの本が構えた主題の相違に私見を加えるものである。また、拙論旧稿に主題の変容に関する指摘をしたが、[2]それらをも含めて再検討するものである。

一　頼朝の登場

源頼朝が作中人物[3]として真名本『曾我物語』に登場するのは、巻一、伊豆奥野の狩の場面である。狩場での酒宴の余興に人々が始めた相撲の勝敗をめぐり、俣野と河津とが対立、人々は二手に分かれて色めき立つ。そこに、

流人兵衛ノ佐殿ハ、伊豆ノ國ノ住人、云ニ南條・深堀ト二人ノ侍ヲ爲テ御友ト御在ケルカ、哀ナル世ノ習哉、奴原カ很コツ心ノ任ニ不レ安、歸命頂禮八幡大薩（マヽ）、願ハ頼朝カ思令ヘトソ遂ケ本意ヲ被ケル祈念、　〔巻一〕

とあり、頼朝は、「哀れなる世の習いかな」と嘆息を漏らす。他の侍たちと会話を交わすこともなく、この騒動を傍観し、「本意」を遂げられるよう神に祈るしかない存在として、登場させられる。そして、この諍いを鎮めるのは大庭景義・土肥実平の二人である。その仲裁の言葉は、

何カニ殿原ハ付テ物ニ狂ヒカ、我等當時ハ平家ノ御恩ヲ蒙ル雨山ト身ノ、不シテ合ハ其ノ御大事ニハ、爲テ私軍ヲ无キ一トモ失テ命ヲハ可キト有ル何ノ全ニハ、　〔巻一〕

である。源家の正統頼朝を前にして、「平家の御恩」を名目として、この私闘を鎮めるのである。ただ、この「平家の御恩」という名目は、作中時間[3]においては考えるまでもなく妥当な名目である。当時頼朝は、平治の乱後、

伊豆配流の身となっている一介の流人に過ぎないのである。

一方、仮名本における頼朝の登場は、以下の如くである。

その頃、兵衛佐殿、伊東の館にまし／＼けるに、相模國の住人大庭平太景信といふ者あり。一門よりあひ、酒もりしけるが、申けるは、「われらは、昔は、源氏の郎等也しかども、今は、平家の御恩をもつて、妻子をはごくむといへ共、古のこう、わするべきにあらず。いざや、佐殿の、いつしか流人として、徒然にましますらん。一夜、宿直申て、なぐさめたてまつり、後日の奉公に申さん」「もつともしかるべし」とて、門五十餘人、いでたちたり。人別筒一あてぞもちにける。これをきゝ、三浦、鎌倉、土肥二郎、岡崎、本間、澁谷、糟屋、松田、土屋、曾我の人々、思ひ／＼に出たちにけり。さる程に、近國の侍、き、つたへ、「われもいかでかのがるべき。いざやまいらん」とて、相模國には、大庭が舎弟三郎、俣野五郎、さこしの十郎、山内瀧口太郎、おなじく三郎、海老名源八、荻野五郎、駿河國には、竹下孫八、合澤彌五郎、吉川、船越、入江の人々、伊豆國には、北條四郎、おなじく三郎、天野藤内、狩野工藤五をはじめとして、むねとの人々五百人、伊豆の伊東へぞうつりける。　〔巻一・佐殿、伊東の館にまします事〕

この会合の後、伊豆奥野の狩が催される。仮名本においては、「流人」である頼朝、「今は、平家の御恩をもつて、妻子をはごくむ」人々、という実状は認めながらも、その関東武士たちが徒然を慰め申しあげる対象として、頼朝は登場させられる。仮名本におけるこの狩は、あくまでも頼朝を中心とした催事となっているのである。振り返って真名本の当該箇所を見ると、

爰ニ亦有一ノ不思議一、武蔵・相模・伊豆・駿河兩四箇國ノ大名達、伊豆ノ奥野ノ狩シテ遊ハムトテ、打ニ超テ伊豆國一入ニケリ伊藤ヵ館一、助親大ニ喜テ賞ツ、様々ニ有ケリ三日三箇夜ノ酒宴、兩四ケ國ノ人々ハ被此以テ五百餘騎ノ勢ヲ一入ニケリ伊豆ノ奥野一、　〔巻一〕

と、頼朝に関する記述は全くない。武蔵・相模・伊豆・駿河の大名たちが、偶々寄り集まって、伊豆奥野で狩を催す。真名本においては、先に引用した頼朝の嘆きによって、狩場に頼朝が同行していたことが知れる。

また、相撲に先立つ酒宴については、真名本では、

爰ニ懐嶋ノ平權ノ守景義進出テ申ケルハ、伊豆ノ奥野ハ何モ取々ニ候ヘトモ名所ニテ、是程ニ不レ候。面白キ處コソ候ケリ吉キ名所ニテ、此ノ程名殘惜ミニ酒宴シテ遊候ハムト云ケレハ、〔巻一〕

と、「名所の名残」に酒宴が催される。真名本におけるこの狩・酒宴は、決して頼朝を中心とした催事ではないのである。仮名本では、

おの／＼柏峠にぞうちあがり、この程の雑掌は、伊東一人して、暇なかりければ、「もたせたる酒、人々の見參にいれざるこそ、本意なけれ。いざや、山陣とりて、頼朝に、今一献すすめたてまつらん」「しかるべし」とて、むねとの人々五百餘人、峠にをりいて、用意す。〔巻一・奥野の狩の事〕

となっていて、その宴は、人々に持たせてある酒を頼朝に勧めるために催されるのである。

さらに、仮名本における人々の諍いの場面を見ると、

兵衛佐殿、此よし御覽じ、「いかに頼朝が情すてて、仇をむすびたまふか。大庭の人々」とおほせられければ、大庭平太うけたまはり、「田舎すまひの物ども、出仕なれ候はで、かゝる狼藉をつかまつり候。相撲はまけても、恥ならず、はれが方人はいふべからず、一々にしるし申べきぞ。後日にあらそふな」といかりければ、大庭のしづめたまふ上はとて、しづまりけり。〔巻一・おなじく相撲の事〕

と、頼朝の諌めによって、この諍いは収まっている。実際に人々を制するのは大庭景義であるが、巻八「屋形まはりの事」における祐経の言葉にも、「當座にて喧嘩におよびしを、御寮の御成敗によりしづまりぬ」ということになっている。そして、真名本に見られた「平家の御恩」という名目は語られることはない。

この、伊豆奥野の狩場における頼朝について、東洋文庫『真名本曾我物語』[4]の補注に、「仮名本では…頼朝の存在が一貫して描かれ、筋の運びが合理化されている」とのご指摘がある。加うるに、仮名本における頼朝の登場は、中心的存在として一貫して描かれているのである。一方の真名本はといえば、頼朝は決してそうではない。そして、真名本における頼朝の登場は、〝中心的存在にはなり得ない存在〟として、これも一貫して描かれ

ていると言ってよいのである。

こうした、真名本の作中時間における頼朝の位置付けについては、先覚のご指摘にある「歴史的なリアリティ指向」[5]の一端であることは言うまでもない。それでは、仮名本における頼朝の位置付けはどのように考えるべきであろうか。次節以降、記事や本文を対照しつつ、検討を試みたい。

二　「頼朝物語」・真名本と仮名本の相違

真名本に従って、頼朝に関する記事――「頼朝物語」――を整理し、概観してみると、以下のようになる。なお、▽は仮名本における記事の減少を、●は仮名本においては記事が異なることを、×は仮名本には記事がないことを示している。

▽1　永暦元年正月、平治の乱の後、頼朝は生け捕られ、池の尼公に宥められて伊豆国北条郡蛭小嶋に配流となって以来、鬱屈した生活を送る。

2　頼朝、伊藤祐親の娘と契り、愛子千鶴御前を儲け、将来に思いを馳せる。

3　祐親、平家を恐れ、頼朝の愛子千鶴御前を殺害する。

4　祐親、娘を取り返し、江馬次郎に嫁がせる。頼朝、妻子との別れを嘆く。

5　祐親、頼朝暗殺を企てる。祐親子息伊藤祐清の知らせによって、頼朝、伊藤の館を脱出、北条の館へ向かう。

6　頼朝、道中、八幡大菩薩に祈念する。

7　頼朝、北条の館へ入る。

×8　北条義時、頼朝を守護する。

×9　祐親、頼朝に夜討ちをかけるが果たせず。

●10　頼朝、北条時政の娘万寿御前（＝政子）のもとへ通う。
×11　義時、父時政上洛中の留守を守るが、頼朝と政子のことを黙認する。
▽12　時政、下向の折り、伊豆国目代平兼隆を政子の聟にとる事を約束する。
▽13　時政、頼朝と政子のことを知り、思案する。
▽14　時政、政子を平兼隆に嫁がせようとする。
×15　政子、頼朝と涙ながらに別れる。
×16　頼朝、北条の館にて嘆く。
▽17　政子、兼隆の館から逃亡、伊豆の密厳院に入り、頼朝へ使者を立てる。
▽18　頼朝、密厳院に入り、政子と対面する。
19　兼隆、密厳院へ攻め上ろうとする。
×20　密厳院の大衆、衆議を開き、頼朝を守護することに決める。
▽21　兼隆、密厳院を攻めることを諦める。北条、この件を黙認する。
×22　頼朝と政子、伊豆山権現に参籠する。
23　安達藤九郎盛長、吉夢を見る。
×24　政子、吉夢を見る。
25　大庭景義、盛長の見た吉夢を判じる。
▽26　治承四年、以仁王が謀叛を起こす。
27　以仁王の令旨が、東国の源氏へもたらされる。
×28　文覚、頼朝に挙兵を勧め、院宣をもたらす。
29　頼朝、兼隆を討つ。
30　頼朝、石橋山の合戦に敗れ、椙山に隠れる。

●31　三浦・畠山、由井・小坪にて合戦し、三浦一族は衣笠城に籠もる。
32　稲毛重成・榛谷重朝・川越重頼・江戸重長、衣笠の三浦を攻め、三浦は安房へ退く。
●33　頼朝、椙山を出て、真鶴崎より安房へ落ちる。
34　頼朝、安房より下総、武蔵へと攻め上り、相模鎌倉に入り、関東を従える。
×35　頼朝、伊豆山から政子を迎える。
●36　平家方には平維盛を大将軍として、源氏方には武田信義を大将軍として富士川の東西に陣を取る。
●37　祐親、自害する。
38　祐清、赦されるも平家につくために都へ上り、北国篠原合戦にて討死する。
39　江馬次郎、処刑される。
40　頼朝、全国を平定する。この合戦によって、敵味方共に多くの侍を失う。
41　頼朝、鎌倉に居を占め、八幡大菩薩を鶴ヶ岡に勧請する。
42　頼朝、吉夢を見た盛長、夢を判じた景義に引出物を与える。
43　建久元年十一月、頼朝、上洛、大納言。翌月、右近衛大将に任ず。
×44　建久元年十二月、頼朝、大納言・右近衛大将を辞し、鎌倉へ下向する。

『曾我物語』の前半部においては、こうして「頼朝物語」が記され、鎌倉幕府ができあがった経緯が語られる。そして、この鎌倉幕府という体制は、曾我兄弟を拒んだ体制であり、物語の主題である「曾我兄弟が苦節の末に父の敵を討った」[6]の「苦節」――或いは「苦境」――の大前提として、読み手に示されているのである。ただ、仮名本の「頼朝物語」については記事の減少が見立つ。仮名本が真名本に比して物語全体を通じ長大化していることはここで改めて言うまでもない。そうした〝仮名本における増補〟という全体的傾向の中にあって、頼朝に関する記事が減少傾向にあるということは、仮名本が頼朝の位置付けを意図的に改変していることを表している。

物語の中で、あらためて頼朝が紹介される記事（1）を、具体的に本文を掲げて見てみたい。真名本では、

抑流人申ハ兵衛ノ佐殿ト、御年云ニ十三ニト永暦元年正月ニ平家ノ侍彌平兵衛宗清ニ東海道ノ内、野上與ノ垂氷ト間ニテ、被ニ給ッ生執ニ、同年ノ三月ニハ故形部卿忠盛ノ後家依ニテ池ノ尼公ノ申状ニ被ニ給ッ宥ニ死罪ヲ、同月ノ十三日ニハ定ニ給ヌ流罪ニ、被ニ給ショッ移ニ伊豆ノ國北條ノ郡蛭ガ小嶋ニ以ノ後、悲ニテ都ノ別ノミ、愛別離苦ノ歎ハ日夜朝暮ニ无ニ晴遣タル方ッ、赤日朗レナレトモ天ニ心ノ暗ハ在リ我ガ身ニ、大庾嶺ノ梅ノ馥レク露ニ、後樹苑ノ櫻ノ匂フ風ニ成ヌレハ程ニモ、人ハ入ル山邊ニ了テ、成ル都ノミ戀ク任ニ、池ノ藤波影見エテ、岸ノ笑冬藪ヌレハ、柳ノ絲ノ片級ニ悲メハ春モ暮ヌト、移ル夏ニ更衣モ、任スル心ニ无キ事ッ、置ク蓮ノ浮葉ニ露、陝ヒ紺青ノ色ニ、籬ノ内ノ瞿麥子ハ、見ルニ蜀江ノ錦ナトヒ付テモ、立マク惜キ晩傾ノ、空ニ山郭公ノ只一聲語フモ、差賀ニ懸ル心ニ夏ナレハ、成ニケリ今日許ニモ、麻緒枝ニ陝懸テ、評ニ荒振神ヲ、付テモ秋風吹ニ、染レ身ニ成ヌレハ程ニモ、花陽洞ノ秋ノ旦ヲ、燕子樓ノ霜ノ夜、姨母捨山ノ明睇、明石ノ浦ノ波ノ音ト、被ニケル思遣ニ、月景モ成ヌレハ名殘少ク、叢ノ蟲ノ聲々モ弱ッ、尾ノ上ノ鹿ノ叫ヒ聲、今日許ナル秋ノ空、爭カ可キ不レ惜マ別ヲ、膚ヘ寒身ノ冬來レハ、夜半ノ霽ニ袖濡テ、夕部ノ炭釜ノ煙ハ過ルニ心ニ細テ付テモ、聞ニモ三世ノ佛ノ御名ヲ、被ニ思ニ出月ノ鼠羊ノ歩ニ、今年モ成ヌレハ今日許ニ、憂カリケル深ケ行ク夜半ッ、

何事ヲ待トモナキニ明暮テ今年モケウニ成ニケルカナ

涙河出テレ色ニ、思カレト物ヲ被ルル問レ人ニ成ヌレハ程ニモ、立フ富士ノ高根ニ言ニ寄セテ白雲ニ知セ心空ナル事ヲ、立フ武呂ノ八嶋ニ煙、云フ燃ル思ノ有樣ヲ程ニ、被ケレ結ハ先世ノ契ノ中ナレハ、御寝ノ眠契今更ニ珍ク、不レ絶ヘ憂キ命ナリセハ、適マ合フ夜ノ喜サニ无ラマシト合事ニ說チッ、先ツ驗キノ涙ノ成ヌレハ淫ル程ニモ、深ケ行ク鐘ノ音、明ケ行鳥ノ空音ニ心迷テ、眠言モ盡ヌレハ、悲カリケル曉ノ別ッ、

古ノ人サエケサハツラキカナ明レハナニカ歸リソメケント

〔巻二〕

詠シ人ノ事マテモ哀ハ不レ盡モ歎ナリ、是テ乍レ歎過キ行ク程ニ空ク送セ給ケル年月ヲッ、

と、平治の乱の経緯を記し、配所にある頼朝の憂鬱を描く。それに対し、仮名本は、

頼朝十三の歳、伊豆國にながされてをはしけるに、かの兩人（伊藤と北条：稿者注）をうちたのみ、年月をおくりたまひけり。

〔巻二・頼朝、伊藤にをはせし事〕

とあるのみである。仮名本は、配流までの経緯や頼朝の鬱々とした心境を一切記さない。真名本とは傍線を施した部分が重なるばかりである。巻一「佐殿、伊東の館にまします事」で、人々が徒然を慰め申し上げる対象として登場させられていた頼朝には、これらのことを記す必要がないのである。

三　頼朝と政子の物語

前掲の「頼朝物語」記事一覧の中で、特に頼朝と政子に関する記事を□で囲んで示した。仮名本にない記事の多くが、頼朝と政子に関する記事であることが判る。さらに、一覧によって、記事自体も減少傾向にあることも判るが、12〜21（或いは22）に該当する部分を、仮名本に拠って示す。

12平家の侍に、山木判官兼隆といふ者を同道してくだしけり。道にて、何となき事のついでに、「御分を時政が聟にとらん」といひたりしことばのちがひなば、13「源氏の流人、聟にとりたり」とうつたへられては、罪科のがれがたし、いかゞせんと思ひければ、14伊豆の國府につき、かの目代兼隆にいひあわせ、しらず顔にて、女とりかへし、山木判官にとらせけり。17されども、佐殿にちぎりやふかゝりけん、一夜をもあかさで、その夜のうちに、にげいでて、ちかくめしつかいける女房一人具して、ふかき叢をわけ、足にまかせて、あしびきの山路をこへ、夜もすがら、伊豆の御山にわけ入給ひぬ。ちぎりくずちは、出雲路の神のちかひは、妹背の中はかわらじとこそ、まぼりたまふなれ。たのむめぐみのくちせずは、末の世かけて、もろともにすみはつべしと、いのりたまひけるとかや。〈中略　牽牛・織女の説話〉18さて、佐殿へひそかに人をまいらせ、かくと申させたまひしかば、鞭をあげてぞ、のぼりたまいける。19目代はたづねけれども、なを山ふかく入たまひければ、21力およばず、北條は、しらず顔にて、年月をぞをくりける。

〔巻二・兼隆聟にとる事（数字は前掲一覧の番号に対応する。以下同じ）〕

真名本の本文は、紙幅の都合上掲げることはできないが、時政の熟考（13）、政子の道行き（17）、頼朝と政子の

再会の喜び（18）等、かなり詳しく描いている。それに対し仮名本は、頼朝と政子の物語の要素のみを抽出してその経緯を記す。仮名本は、15・16に該当する記事を載せない事からも、別離の悲しみや再会の喜びといった、頼朝と政子の感情の面には、殆ど関心を向けていないことが判る。加えて、政子の道行きにおいては、「出雲路の神」という言葉の説明として牽牛織女の説話を引用することによって、真名本に描かれた政子の必死の思いは、仮名本ではすっかり色褪せてしまうのである。

仮名本においては、政子が物語に登場する箇所はこれが最後で、以降に登場することはない。しかるに真名本では、再会を喜び合った後、頼朝は政子を伊豆山に残し挙兵、一時安房まで退くも、徐々に攻め上り関東を打ち従え、政子を鎌倉へ迎え入れる（35）という、頼朝と政子の物語に限って言えば、大団円とも言うべきくだりを有している。

昔ハ自二伊豆ノ御山一有テ御使一、奉レ迎二佐殿一ヲ捧レ袖ヲ、今ハ自二木瀬河一有テ御使一、奉レ迎二北ノ方一ヲ被レ濡レ袂ヲソ、夫婦ハ申ス二世ノ契ト事ハ昔語ニコソ申習ハセシカ、今佐殿ノ夫婦ノ御中コソ不レ替レ生ヲ顕シ給ケレト二世ノ契ヲ、有レ心程ノ人々ハ語テ流シケリ感涙ヲ、乃往過去ノ契何カナレハ、是程ニ互ニ御志ノ深クシテ思レ物ヲ成給ラムト宿世ト悲ム、昔ノ事モ被テ思二出今ノ様ニ、涙モ更ニ不レト留ラ、奉レ見外ソノ袂マテモ不レ捧ラ无カリケリ人ハ、〔巻三〕

真名本は、こうして頼朝と政子の物語を語り終えるのである。仮名本には、これに該当する記事はない。

政子という女性については、真名本・仮名本ともに高い評価を与えている。真名本では、頼朝の本意を遂げさせたいと政子が祈ったこと（22）と、政子の吉夢とその夢を自身で判じたこと（24）について、その評価が伺える。殊に24の記事では、

而レハニ耶、鎌倉殿取セ給ツ、世ヲ、持テ二日本國一ヲ十九年ナリ、申ス廿年ト正治元年有シカハ逝去一、爲テ其後家ト、二位家ノ御代トテ承久兵亂ノ時モ討二亡シ、京方ヲ、奉テ取二後鳥羽ノ院一ヲ奉給流二隱岐ノ國一ヘ、其後ハ申ス隱岐ノ院ト、女性ナレトモ信力堅固ノ故ニ權現ノ御利生ヲ蒙ケルコソ立處ニ難ケレ有、而ハ平家ニ副テ曾我一ヲ渡タリケルニ、唐人是ヲ披見シテ、問ヌルニ日本ハ小

國トコソ、斯ル有リケル賢女ノ耶ト盛シ合ケルトカヤ乎、於ニ日本唐ノ兩州ニ施テ賢女ノ名譽ヲ、爲ニハ末代ノ女人ノ難カリシ有手本ナリ、〔巻三〕

と、後に承久の乱を鎮めたこと、真偽は別として、唐人に賢女として賞賛されたことなどを記している。仮名本には、22・24の両記事は載らないが、仮名本の独自記事、政子を紹介する場面に、「この二十一の君（政子：稿者注）、女性ながら、才覚にすぐれしかば」（巻二・橘の事）という文言がある。但し、これは、妹が見たという吉夢の内容を聞き、橘の故事を想起したことについて言っているのであり、真名本における政子の評価とは質を異にすると言わざるを得ない。また、この仮名本の夢の話は、夢の売買をしたことによって頼朝と政子が出会う、という、二人の出会いの逸話であり、このことについては、仮名本における説話の引用という観点から、別して考えなければなるまい。

真名本は、『曾我物語』という作品の一部分である、この「頼朝物語」において、頼朝と政子、双方の経緯や哀楽を具に語ることによって、「障害を乗り越えて結ばれた頼朝と政子の物語」を形成している、と言える。『曾我物語』の「曾我兄弟が苦節の末に父の敵を討った」という主題の内、「苦節」――或いは「苦境」――を語るのに、真名本においてこの物語は、語られるべきものだった、のである。一方、仮名本には、この物語はないと言ってよい。頼朝と政子の別れの場面における二人の嘆きや苦悩、再会の喜びは悉く記さない。頼朝と政子の物語は登場人物の感情も描かれずに、その経緯ばかりが記される。「頼朝と政子の物語」と言えるようなまとまった文章が存在しないのである。仮名本の作者にとっては、「曾我兄弟が苦節の末に父の敵を討った」という『曾我物語』の主題を語るのに、頼朝と政子の哀楽の物語は、語る必要がなかった、のである。

ところで、一覧にも示したとおり、頼朝は、政子と出会う前に伊藤祐親の娘に通い、一子を儲けている。祐親によって父子・夫婦の仲は裂かれ、頼朝は深く嘆く（2～6）のであるが、これらの記事における頼朝の嘆きや

苦悩については、仮名本にも描かれている。仮名本は、〝女性〟をめぐる頼朝の嘆きや苦悩に無関心なのではないのである。頼朝は、『曾我物語』の主人公、曾我兄弟の祖父にあたる祐親から、冷遇され、嘆き、苦悩する。その嘆きや苦悩を語ることによって、頼朝は祐親と敵対することが明らかになる。そして、曾我兄弟が、頼朝と敵対した祐親の孫であることは、「曾我兄弟が苦節の末に父の敵を討った」という主題へと繋がっていく。であるから、仮名本は、祐親娘をめぐる頼朝の苦悩だけは、語らなければならなかった、のである。

四　頼朝挙兵から全国平定

『曾我物語』には、頼朝の挙兵から、富士川の合戦まで、つまり、主として東国における合戦の様が記されている（27～36、35を除く）。これらの記事は、文覚が院宣をもたらした記事（28）を除いて、真名本・仮名本ともに載る。以下に、両本の、石橋山合戦から頼朝が安房の国へ落ちるまでの記事（30～33）を引用し、『平家物語』諸本をも参照しつつ比較・検討を試みたい。

【真名本】

（30）同ク廿三日ニハ、相模ノ國ノ住人、鎌倉ノ權五郎景政カ末葉、大庭ノ三郎景親志ヲ運テ平家ニ、相ヒ催ヲ、糟屋ノ權ノ守盛久・俣野ノ五郎景久・澁谷ノ庄司重國・海老名ノ源八季貞・秦野ノ馬ノ允能常以下一門ノ者共ヲ、以テ三千餘騎ノ勢ヲ押ニ寄ヲ、石橋ノ城ヘ責ル之ヲ間、佐殿御心許ハ雖トモ武ト、依テ无勢ナルニ、僅ニ、被ヲ、討ニ成サ五六騎ニ、引ニ込セ給ヌ相山ニ、景親乗テ勝ニ、踐ミ野ヲ、尋ネ山ヲ、搜リ求ル間、（31）同キ廿四日ニハ、云ニ鎌倉ノ郡由井ノ小坏ト處ニテ、佐殿所レ憑給軍士三浦ノ一族與ニ畠山ノ次郎一合戦シテ、重忠カ軍ハ破ニケリ、是ハ平家ニ有レルニハ志无ケレトモ、父ノ莊司重能京ニテ候ニ平家方ニ間、爲ニ繼ムカ彼ノ首ヲ向フ石橋ノ戰場ヘ處ニ行合テ合戦シケリ、然テ後ニ義澄ノ一黨ハ引ニ籠ヌ三浦ノ郡徹柵ノ城ニ、石橋ノ兵共殆ト成リケル浮雲ソ、土肥ノ次郎實平・佐々木ノ四郎高綱等命モ不レ惜防キ戦ケレハ、佐殿遁テ陣頭ヲ引ニ退給ヌ上ノ杉山ヘ、（32）同廿六日ニハ武藏ノ國之住人ニ稲毛ノ三郎重成・榛谷ノ四郎重朝・河越ノ太郎重頼・江戸ノ太郎重

長以下ノ軍士等、同シク志ヲ運テ平家ニ押ニ寄セケレハ衣笠ノ城ニ、引ニ退ク安房ノ國ヘ、(33)大庭ノ三郎景親ハ引ニ退ク本陣ニ、兵衛ノ佐殿ハ出ニ給フ、杉山ニ、乗テ舟艇ニ、北條ノ四郎時政・子息ノ小四郎義時・土肥ノ次郎實平等七騎列テ、白リ土肥ノ麼那鶴カ崎ニ落給安房ノ國ヘ、凌キテ雲濤煙浪ノ中ヲ、差レテ東ヲ漕ク程ニ、云ヘ、安房ノ國北ノ郡狩嶋ト付給ス處ニ、三浦ノ人々ハ參テ、佐殿ノ御前ニ、語テ由井ノ小坏・石橋・衣笠ノ合戰ノ事共ヲ、互ニ被レ流レ感涙ヲ、　（巻三）

【仮名本】

(30) こゝに、相模國の住人大庭三郎景親、平家の重恩を報ぜんために、當國石橋山にをいかけ、さん〴〵にたゝかふ。これのみならず、武藏・上野の兵ども、我おとらじとはせむかひて、ふせぎたゝかふ。(31) その中に、畠山重忠は、父重能・叔父有重、折節、平家の勘當にて、京都にめしおかるゝ最中なれば、その科をもはらし、國土の狼藉をもしづめんとむかひけるが、三浦黨、頼朝の謀叛に與力せんとて、はせむかひけるが、鎌倉の山比といふ所にてゆきあひ、さん〴〵にたゝかひけるが、重忠うちをとされて、希有の命いきて、武州にかへりけり。(32) その後、江戸・葛西をはじめとして、武藏國のものども、一千餘騎、三浦へおしよせ、身命をすててたゝかいければ、三浦うちまけて、[1]今は、大介一人になりにけり。年九十餘になりけるが、子孫にむかいて申けるは、「兵衛佐殿の浮沈、今に有。おのれら一人も、しにのこりたらば、みつぎたてまつれ」と申をゐて、腹きりをわんぬ。(33) [2]さても、伊東入道は、もとより佐殿に意趣ふかき者なりければ、一合戰とはせむかひけるが、たのみし畠山うちをとされぬとき、て、伊豆の御山よりかへりにけり。佐殿、無勢たるによつて、心はたけくおもはれけれ共、此合戰かなふべしとは見えざりける。されども、土肥二郎、岡崎惡四郎、佐々木四郎、命をおしまず、たゝかひけるその隙に、佐殿のがれ給ひて、杉山に入給ひぬ。北條三郎宗時、佐那田與一もうたれけり。佐殿、七騎にうちなされ、大はらはになりて、大木の中にかくれ、その曉、山をしのびいで、安房國りうさきへはたりたまふとて、[3]海上にて、三浦の人々、和田小太郎義盛にゆきあひて、船共をこぎよせ、たがいに合戰の次第をかたる。義盛は、衣笠の軍に、大介うたれし事どもかたりければ、土肥・岡崎は又、石橋山の合戰に、與一がうたれし事どもをかたり、たがい

に鎧の袖をぞぬらしける。さて、安房國にわたり、　〔巻二・兼隆がうたるゝ事〕

真名本・仮名本ともに、記されている記事は概ね共通する。しかし、細部を見ていくと、次の三つの相違点が見られる。

①仮名本には、三浦義明の自害が描かれていること。(32)

②仮名本には、伊藤祐親が頼朝を攻めようとしたことが載ること。(33)

③仮名本では、三浦の人々と和田義盛が海上で出会い、合戦の次第を語り合い、真名本では「安房国北郡狩嶋」に着いた頼朝の御前で合戦の次第を語るということ。(33)

相違点①、衣笠城合戦における三浦義明に関する記述が真名本にはない。『平家物語』の延慶本や長門本では、義明は衣笠城を退く途上に横死を遂げる点が仮名本とは異なるが、「佐殿ノ生死ヲ聞定メム程ハ、甲斐ナキ命ヲ生テ、始終ヲ見ハテ奉ルベシ」[8]（延慶本・第二末）という、義明が子孫に向かって言い遺した言葉の内容が共通する。『平家物語』諸本中で、義明に関する記事を載せないのは、四部合戦状本である。相違点②については、延慶本や長門本には、祐親が土肥実平の家を焼き払ったこと、船出をしようとする頼朝等を追いかけたことなどが記され、仮名本と通ずるものがあるが、それとは別に、仮名本における祐親の人物造型も考え合わせなければなるまい。相違点③については、延慶本は、

遥ノヲキニ、雲井ニキヘテ、船コソ一艘ミヘタリケレ。此人々申ケルハ、「アレニ見ユル船コソアヤシケレ。是程ノ大風ニ、海人船、釣船、アキナイ船ナムドニテアラジ。アワレ、兵衛佐殿ノ御船ニテヤ有ラム。又敵ノ船ニテヤ有ラム」トテ、弓弦シメシテ、用心シテ有ケルニ、船ハ次第ニ近クナル。誠ノ兵衛佐ノ御船ナリケレバ、カサジルシヲ見付テ、三浦ノ船ヨリモ笠ジルシヲゾ合ケル。猶用心シテ、兵衛佐殿ハ打板ノ下ニ隠奉リテ、ソレガ上ニ殿原ナミ居タリ。三浦ノ人々ハイツシカ心モトナクテ、船ヲゾ押合ケル。船押合テ、輪田小大郎申ケルハ、「イカニ、佐殿ハ渡ラセ給カ」。岡崎申ケルハ、「我等モ知進セヌ時ニ、尋奉リテアリクナリ」トテ、昨日、一昨日ノ軍ノ物語ヲゾ初ケル。三浦ハ「大介ガ云シ事ハ」トテ、語リテ泣。岡崎ハ「与

一ガ打レシ事ハ」トテ、語テ泣。　〔第二末・三浦ノ人々兵衛佐ニ尋合奉事〕

とし、仮名本との共通性を示している。長門本も延慶本と同様であり、安房国に着いた頼朝の御前で合戦の次第を語るとするのは、やはり四部合戦状本である。因みに、『吾妻鏡』治承四年八月二十七日の記事に拠れば、海上で出会ったのは、三浦の船と北条の船とである。

四部合戦状本と真名本との関係については、かねてから先覚のご指摘があるが、その先後関係・依拠関係については未だ不明である。[9] 真名本が四部合戦状本に先行するという立場をとる場合、真名本は、独自に、あるいは何がしかの資料――少なくとも延慶本等の『平家物語』以外の資料――に基づいて、この、東国における頼朝の合戦を描いたということになる。仮名本は、古態を存するとされる太山寺本（天文八年書写）に遡っても、延慶本本文の成立には後れることは確かである。相違点③に見られるような、物語の展開における「人」や「場」の相違は、誤写や誤脱等の書写性本文変化[10]から生じるはずがなく、明らかに、依拠資料の選別・相違を含めた改作、著作性本文形成[10]の結果であると言える。仮名本が、東国における頼朝の合戦を、延慶本等の『平家物語』という作品に描かれた合戦の様に取材して改作を行っていることだけは明らかなのである。

また、富士川合戦以降（36）を、真名本・仮名本それぞれの本は、以下のように記している。

【真名本】

斯ケレトモ平家ハ不シテ知レ之ヲ、勢ノ不フニ付カ前ニ、小松ノ少將維盛ノ朝臣ヲ爲ニ大將軍ト、率テ十萬餘騎ヲ付ク富士河ノ西ノ岸ニ、佐殿ハ爲ニ御用心ノ、甲斐ノ國源氏ニ武田ノ太郎信義ヲ爲テ大將軍ト、率テ二萬餘騎ヲ在リ富士河ノ東ノ岸ニ、白ノ都討手ノ使、不ヌタニ而ラ旅行ク心ハ哀ナルニ、倍テ趣ク戰場ヘ習ヒ、心ハ爲レ恩ノ被レ仕ハ、命ハ依テ義ニ輕ケレバ、必スシモ平ラカニテ難シ知リ歸京セム事モ、誠ニ可キ危カル有様ニテ、不ヌ知ラ境ヘニ隔テ日ヲ、都ヲハ思ヒ成ス雲ノ外ソニ、可シ心細ク悲カル、

アウサカノ關打コウル程モなく今日ハ都ノ人ソ戀シキ　〔巻三〕

【仮名本】

されば、平家おどろきさはぎ、たび／＼討手をむかはすといへども、あるいは鳥の羽音をきゝて、しりぞく

者あり。又は、戰場にこらへずして、輾にてうちおとさるゝもあり。〔巻二・兼隆がうたるゝ事〕

両本ともに、これ以降の源平合戦について記すことはない。頼朝が全国を平定し平安の世が訪れた、と、『曾我物語』の記述は続くのである。

『玉葉』『山槐記』等に拠れば、富士川の平家敗走について、当時様々な報道がされたようである。しかし、仮名本の、「鳥の羽音をきゝて、しりぞく者あり」というくだりは、そうした記録類にあたるまでもなく、『平家物語』の記述を踏まえていることが、『平家物語』を読んだことがあるものであれば判ることであろう。ここに引用した真名本の記述も、四部合戦状本に重なることは既に御指摘があるが、真名本は、頼朝の全国平定の過程において、富士川の平家敗走について全く記さない。やはり真名本は、延慶本等の『平家物語』を経た源平の合戦を描いているのではないのである。そして仮名本は、やはり『平家物語』という作品を通して、源平の合戦を描いているのである。

真名本は、未だ検討の余地はあるものの、少なくとも延慶本等の『平家物語』を通して、頼朝の挙兵から全国平定までを描いているのではなさそうである。これまでに見てきたように、真名本は、頼朝の鬱屈した時代をその心情描写を織り交ぜて事細かに記す。『曾我物語』という作品の前半部において、政子との物語を含めた「頼朝物語」を形成し、「頼朝が流人の憂き身を経て全国を平定した」という部分主題を構えている。そうして、曾我兄弟の仇討ちが行われた時代に至る経緯を享受者に示すのである。この部分主題は「曾我兄弟が苦節の末に父の敵を討った」という『曾我物語』の主題における「苦節」――或いは「苦境」――を説明する機能を持って『曾我物語』の中に組み込まれていると言ってよい。

一方、仮名本が頼朝の挙兵から全国平定までを、『平家物語』として成立した作品を通して描いていることが確認できた。仮名本の作者は、曾我兄弟の仇討ちが行われた時代――兄弟の「苦境」の大前提――を知っていて、その時代がどのように創り上げられていったかを『平家物語』に拠って知っていた。と同時に、物語を享受

する人々も、それらを知っていたのである。そうした知識の共有――歴史認識――が、仮名本における頼朝の登場、政子との物語の縮小、そして全国平定記事の記述に表れている。仮名本の作者は、頼朝の苦難の時代は記すまでもない――或いは曾我兄弟の仇討ちに至るまでの苦悩と、頼朝の苦悩は繋がらない、と判断したのである。『平家物語』に描かれた合戦の様を通して、東国における頼朝の合戦を記す仮名本は、『平家物語』を通した分だけ歴史から離れるわけで、その「離れ」が、真名本に見られた部分主題を失わせているのである。

五　兵衛佐殿と鎌倉殿、そして頼朝

「歴史離れ」の様を見る一つの指標として、その呼称を真名本・仮名本それぞれに整理してみたい。

真名本における頼朝の呼称は、徹底していると言ってよい。すなわち、作中人物として巻二に登場してから、全国を平定する巻三の末尾（第二節記事一覧の41）まで、一貫して「兵衛佐殿」或いは「佐殿」を用いている。そして、全国平定後、すなわち巻四以降、頼朝の呼称は全て「鎌倉殿」[11]となる。真名本は、各巻毎に一字下げで序文を記すが、巻四の序文は、

治承四年庚子八月十七日ノ夜、兵衛ノ佐殿ハ以テ北條ノ四郎時政以下ノ兵共ヲ、亡テ山木ガ後ハ、討ノ順ノ、日本國ヲ、今鎌倉殿ト預リ給ヘリ日本將軍ノ宣旨ヲ矣

〔巻四・序文〕

と、「兵衛佐殿」であった頼朝が、「日本国を討ち順え」て、「鎌倉殿」として「日本将軍」の宣旨をうけた、と宣言するのである。果たして、この宣言以降、頼朝は全て「鎌倉殿」と呼ばれる。そして、これらの「兵衛佐殿」「佐殿」と「鎌倉殿」の呼称の使い分けは、語り手は勿論、作中人物の会話においても一貫している。但し、巻三に二回、「鎌倉殿」という呼称が用いられる。一つは政子が吉夢を見る記事（24）においてであるが、語り時間[3]としては承久の乱後であって、頼朝の呼称としては齟齬を生じない。もう一つは、源平の合戦で討たれた者どもを記す場面（41）においてである。しかしこれも、頼朝が犯した殺生の罪業は一条忠頼・源範頼・平広常の三

人である、だから毎日法華経を読誦しているのだ、と、「鎌倉殿」が「折々」に往時を振り返って語ったとあるので、語り時間としては「鎌倉殿」で問題はない。他に、頼朝の発話の中で一人称として用いられているのを除き、頼朝を「頼朝」と呼んでいる例が二つある。それは伊豆山に籠もった政子がその祈請の中で用いる(22)のであって、神前における謙譲表現であることは言うまでもない。つまり、真名本は、頼朝の呼称に関してかなり注意を払っているのである。まさに、物語の導入部で源氏の累代を記す、

左馬ノ頭義朝ノ嫡子ハ鎌倉ノ悪源太義平、次男ハ中宮ノ大夫進朝長、三男ハ兵衛佐頼朝、今平家亡テ後補ス右近衛ノ大将ニ、被レ成ニ日本ノ将軍ニ申ニ右大将殿ニ、鎌倉殿ニテ御ハ在ス日本國ノ大将軍ニテ上ハ不ル及ニ子細ニ、　〔巻一〕

という言葉のとおりの呼称の用い方をしているのである。

仮名本には、地の文だけでも、「兵衛佐殿」「佐殿」「鎌倉殿」「御寮」「君」「頼朝」と、様々な呼称が用いられている。[12]そして、「兵衛佐殿」「佐殿」と、「鎌倉殿」「御寮」「君」とは、頼朝の全国平定（巻二）を境にある程度は使い分けられていると見ることができる。また、全国平定以後の頼朝は、「君」と呼ばれることが七一例と最も多く、真名本に徹底して用いられた「鎌倉殿」は、二〇例である。仮名本には、真名本の〝鎌倉殿と呼ばれるに至った〟というような宣言はなく、巻三「源太、兄弟めしの御つかひにゆきし事」に用いられる例が初出である。この記事は真名本に載らず、年号も記されてはいないが、「一萬十一、箱王九」の年のこととし、頼朝は全国を平定し「頼朝にまさる果報者はあらじ」と述懐しているので問題はない。他に、頼朝が全国を平定した後、頼朝を「兵衛佐殿」と呼ぶ例が一つある。兄弟が、富士野へ赴く途上箱根へ参詣し、別当から太刀を授かる場面で、別当が太刀の由来を語る部分においてである。

美濃國垂井の宿にて、商人の資をとらんとて、夜討のおほく入たりしか共、おきあふ者もなかりしに、牛若殿一人おきあひ、究竟のつわ者十二人きりとゞめ、八人に手をおほせて、おほくの強盗おつ返す、高名したる太刀也とて、奥州まで祕藏せられけるに、十九の年、兵衛佐殿謀叛をおこしたまふときこしめし、鎌倉に上り、見參にいり、幾程なくして、西國の大將軍にて、發向せられけるに、今度の合戰にうちかたせ給へと

て、此御山へまいらせられたまひて候。自然に僻事し出候て、上より御たづねあらば、法師が御邊にたてまつりて、狼藉なりと、御不審あらん時は、京にのぼり、四條町にてかひとりたるよし申さるべし。

〔巻八・箱根にて暇乞の事〕

ここに記される「兵衛佐殿」は、まさに頼朝挙兵の往時であり、「兵衛佐殿」で問題はない。そして、連続する発話の中で、次は頼朝を「上」と呼んでいる。こちらは現在もしくは近い将来の頼朝を指すわけで、「上」と呼称を改めていると理解できる。仮名本において多用される「君」という呼称は、一国の君主とも主人として仕える人とも解釈でき、曖昧であるが、「君」と称される頼朝のうち七〇例が全国平定後の頼朝を指して用いられているので、仮名本における「君」は、君主として把握できよう。ただ、地の文において頼朝を「君」と呼ぶ初出例（巻二・祐清、京へのぼる事）では、「君」と称された頼朝の許可を得て、伊藤祐清は上洛、北国合戦にて討ち死にしたとする。つまり、頼朝の全国平定以前のことなのである。但し、この時点で頼朝は関東を従えているとするので、そうした意味で「君」が用いられているのであれば問題はない。仮名本においては、このような例が一例あるものの、頼朝の全国平定を境とした呼称の使い分けは概ね意識されていると言える。

それでは、「頼朝」という呼称についてはどうであろうか。仮名本の地の文における「頼朝」という呼称は、物語の全般にわたって一三例見られる。真名本は地の文において単に「頼朝」と記すことはない。ところが仮名本においては、頼朝を「頼朝」と呼ぶのは語り手ばかりではない。曾我兄弟が、頼朝を「頼朝」と呼ぶのは仇討ちの障害である頼朝への敵意と解せるが、先に第二節で引用したように、狩場で酒宴を催す場面で、「頼朝に、今一献すすめたてまつらん」と、作中人物の発話の中にも用いられているのである。これらの仮名本に見られる「頼朝」という呼称には、尊敬や謙譲、侮蔑も含まれていない。そうした敬意などを超越して、一人の歴史上の人物として、或いは神格化された人物[13]として、憚りなく「頼朝」と呼んでいるのである。仮名本において頼朝は、語り手が細心の注意を払って呼称を使い分けるような存在ではないのである。仮名本と頼朝の時代との間の時間的隔たり――歴史からの「離れ」――が、「頼朝」という呼称を生んだのである。仮名本で「三男右近衛大將

頼朝の上こす源氏ぞなかりける」（巻一・惟喬惟仁の位あらそひの事）と、源氏の累代に並べられる頼朝は、すでに「右近衛大将」としての「頼朝」だったわけである。

まとめ

この作品が、『曾我物語』と題された作品である以上、その主題が、「兄弟が苦節の末に親の敵を討った」ということは揺るがない。ただ、真名本は、特に物語の前半部において、兄弟に苦節を強いた時代もまた、苦節の上に成り立ったものであることを記し、その部分に、「頼朝が流人の憂き身を経て全国を平定した」という、部分主題が構えられているのである。一方、仮名本には、そうしたものがない。仮名本における頼朝の全国平定は、苦節の末に成ったものとはされない。頼朝による全国平定という史実は、仮名本の作者及び享受者にとっては共有された知識であって、兄弟の物語を語るのに、頼朝の苦節の時代を語ることは必要とされなかったのである。そうであるから、仮名本では、本稿冒頭の真名本引用部に対応するところを、

しかれば、ちかごろ、平氏ながく退散して、源氏をのづから世にほこり、四海の波瀾をおさめ、一天のはうきよさだめしよりこのかた、りらくりんゑたかいいて、ふく風の聲おだやか也。しかれば、叡慮をそむくせいらうは、色を雄劔の秋の霜におかされ、てこそをみたすはしは、音を上弦の月にすます。これ、ひとゑに羽林の威風、先代にもこゑて、うんてうの故也。しかるに、せいしおひそめて、せいとのみだれを制し、私曲のあらそいおやめて、歸伏せらるるはなかりけり。〔巻一・惟喬惟仁の位あらそひの事〕

こゝに、伊豆國の住人、伊東二郎祐親が孫、曾我十郎祐成、をなじく五郎時致といふ者ありて、將軍の陣内もはゞからず、親の敵をうちとり、藝を戰場にほどこし、名を後代にとゞめけり。〔巻一・伊藤を調伏する事〕

と、特に驚きの感情を伴わずに、仇討ちの端を語り始める。頼朝による全国平定が共有の知識であったと同時に、

兄弟の仇討ち事件もまた、共有の知識として人々の驚きを誘わないのである。

ある一つの歴史的事実に関する描写が、作品の中でどのように意味付けられ、位置付けられているかを見る事によって、その作品の「歴史離れ」の様相が窺える。源平の合戦という史実の描写を通して、また、呼称というモノサシによって、仮名本の「歴史離れ」の様を検討した。仮名本における「歴史離れ」によって、頼朝の憂慮は実感や共感を伴わなくなり、真名本に見られた部分主題は失われた。頼朝の苦節は『曾我物語』の主題に繋がらないのである。物語は「兄弟が苦節の末に親の敵を討った」という主題を軸に展開し、兄弟が強いられた「苦節」がどういう背景をもっていたのかという興味よりも、如何なる「苦節」であったのかという興味によって、兄弟に訪れた処刑の危機、梶原景季との敵対関係、和田義盛との盃論など、史実から離れた部分――或いは史実として跡付けられない部分――が増幅・附会されていく。そうした、歴史からの「離れ」の大小によって、大きく異なる造型をされたのが、『曾我物語』における源頼朝なのである。

注

1　真名本の『曾我物語』本文の引用は、角川源義氏編『妙本寺本曾我物語』（角川書店、昭和44）に拠る。仮名本本文の引用は、日本古典文学大系『曾我物語』（岩波書店、昭和41）に拠るとともに、国文学研究資料館日本古典文学本文データベース（実験版）を利用した。また、「仮名本」とは、広く仮名で表記された本のことであるが、本稿では十行古活字本（日本古典文学大系『曾我物語』の底本）に代表される十二巻本を指す。広義の仮名本諸本中で古態を示すとされる太山寺本と記事の相違がある場合は、注にふれることとする。なお、真名本と仮名本とで人名表記に異同があるので、真名本引用部分以外は仮名本の表記に従う。

2　拙稿「曾我十郎五郎の分担―「さはがぬ男」と「たまらぬ男」―」（「筑波大学平家部会論集」6（平成9・6））、「仮名本『曾我物語』における梶原景季について」（「筑波大学平家部会論集」7（平成11・3））、「仮名本『曾我物語』における〝若侍〟の活躍について」（「軍記と語り物」36（平成12・3））など。

3　「作中人物」「作中時間」「語り時間」は、犬井善壽氏（『流布本平家物語』1（加藤中道館、昭和55）所収「解説」）の定義に従う。

4　東洋文庫『真名本曾我物語 1・2』（平凡社、昭和62～63）。

5　村上學氏「真字本と仮名本のストーリー構造」（『曽我物語の基礎的研究』（風間書房、昭和59）所収）に拠る。

6　拙稿「仮名本『曾我物語』における梶原景季について」（『筑波大学平家部会論集』7（平成11・3））においては、真名本と仮名本との主題の相違にふれたが、本稿では、大きく「兄弟が苦節の末に父の敵を討った」という主題にまとめた。これは、「兄弟が苦節の末に父の敵を討った」という以外の部分主題を検討するためである。

7　太山寺本には、橘の故事は載らない。従って、「この二十一の君、女性ながら、才覚にすぐれしかば」という、政子を讃える字句はない。ただし、夢を買い取る場面で、「是によりて廿一の君、程なく日本の主と成り給ひぬ。不思議なる事どもなり」とあり、真名本に載り仮名本に載らない、承久の乱後の政子の立場が記されている。

8　延慶本『平家物語』本文の引用は、北原保雄氏・小川栄一氏編『延慶本平家物語本文篇上・下』（勉誠出版、平成11（再版））に拠る。

9　四部合戦状本先行説には、福田晃氏「平家物語と曾我物語――頼朝蜂起説話における伝承関係――」（「大谷女子短期大学紀要」9（昭和41・3））、稲葉二柄氏「真名本曾我物語の本文形成過程――頼朝蜂起説話の検討を通して――」（「中世文学研究」6（昭和55・8））等があり、真名本先行説には、早川厚一氏「平家物語の古態について　四部本・延慶本本文の成立をめぐって――」（「日本文学」34：11（昭和60・11））、渡辺達郎氏「四部合戦状本『平家物語』の成立と真名本『曾我物語』」（「国語国文」68：9（平成11・9））等がある。

10　「書写性本文変化」「著作性本文形成」は、犬井善壽氏『『平家物語』の成立基盤――その書承的側面――』（あなたが読む平家物語1『平家物語の成立』（有精堂、平成5）所収）の定義に従う。

11　「鎌倉殿」という呼称は、『吾妻鏡』には寿永元年五月二十五日の記事に見られるが、頼朝が鎌倉の地に幕府を創設した以後のものであることは明らかである。

12　本稿では、「仮名本」として十行古活字本を代表させて扱ったが、頼朝の呼称については諸本間で異同がある場合がある。紙幅の都合で仮名本諸本を並べることは不可能だが、「頼朝」という呼称を排除した仮名本は、管見の限り存在しない。

13　近時、山下宏明氏が「能と平家のいくさ物語――『重衡』をめぐって――」（『文学』1：6、平成12・11）においてふれておられる。

付言　初校の後、山西明氏「『曾我物語』の軍記物語的特質―真名本と仮名本との対比を通して―」（同氏著『曾我物語生成論』（笠間書院、平成13年）所収）に接した。氏は流人「頼朝」の描出・呼称・年代記的叙述の検討から、仮名本における軍記物語的特質の希薄化を説かれており、本稿の論旨と重なるところがある。

本稿は、平成十二年度筑波大学学内プロジェクト研究の助成に基づくものである。